

Ogden による「あいだ」の空間からみた青年の親子関係 — 「育ち」と「育て」の教育心理学的考察 —

逸見 敏郎

親子関係とは、親と子の「あいだ」の様態を示すことに他ならない。本論文では精神分析学者 Ogden の知見に基づきながら、青年が「育てられた」のか「育てたのか」という親子の「あいだ」の空間について、明らかにすることを目的とする。

1. 「あいだ」の空間概要

1.1 「あいだ」の空間とは

Freud に始まる精神分析学は、分析家が被分析者を治療する one-person model から始まる。これは一定の訓練を積んだ専門家として分析家が、分析（治療）対象として被分析者を同定し、治療的操作をおこなうという one way の関係性に基づくものである。具体的には分析家は、被分析者の意識および無意識を治療対象として取り扱い、解釈をおこなうということになるが、ここでは分析家の無意識、また治療関係の中で影響を受けるであろう意識の変化については、捨象されてしまう。それは、分析家は、国際的に厳密に決められたトレーニングを10年以上重ねた「専門家」であるという静的なポジションに自らを置くからであり、被分析者は変容する対象であるが、分析家は変わらないという治療的枠組を想定しているのである。

その後、精神分析学は対象関係論に依拠する Winnicott らによる、分析家と被分析者の二つの主体による相互作用（inter play）に着目し

た two-person model として展開する流れが見られた。この two-person model では、分析家と被分析者は相互に影響を及ぼしあい、両者に心の変容が生じることを想定したものである。これは、Winnicott が自身の子どもへの臨床の中で「遊ぶこと plying」や「空想 fantasy」を重視し、治療ツールとして分析家と被分析者の間で相互になぐり書きをおこなうスクイッグルを利用したことに遠因があると言えよう。たとえば「遊び」に関して Winnicott は「精神療法はふたつの遊ぶことの領域、つまり患者の領域と治療者の領域が重なり合うことで成立する。精神療法は一緒に遊んでいる二人に関係するものである。遊ぶことが起こりえない場合、治療者のなすべき作業は、患者を遊べない状態から遊べる状態へと導くよう努力することである」（Winnicott,1971）と「遊び」は精神療法を展開する上で、治療者と患者の間にあり、双方の関係性に関わり、治療上、重要な機能を果たすことを明らかにした。

ここで注目しておくべきことは、Winnicott による「遊びの空間（場）」である。遊びが生じる空間は、治療者と患者の双方が関与することにより成り立つ不可視的空間である。そこは、精神分析的治療構造を成り立たせる二人の登場人物の意識、無意識が交錯しあい、相互に影響を与え合う空間とも言えよう。また、Winnicott は、子どもの精神発達における移行

対象（transactional object）にも言及しているが、この移行対象も内的現実と外的生活のふたつの世界を取り結ぶ間にある空想に満ちた遊びの空間である。

ところで、この「あいだ」についての関心は、我が国では文化的な影響もあり、精神医学界では、木村敏の「あいだ」を軸とした自己論をはじめ、「あいだ」を基に対人恐怖の病理を明らかにした内沼幸雄らが精神病理論として1970年代から取り上げてきた。海外に目を向ければ、1994年にOgdenが‘Subjects of Analysis’を刊行したことで、アメリカ精神分析学界でも、「あいだ」の空間に注目が集まった。もちろん、Ogdenの前にも、自己心理学を確立したKohutもその理論のなかで、「あいだ」に注目していたひとりではある。しかし、フロイトから始まる精神分析学の理論を分析家と被分析者のふたつの主体とその「あいだ」の空間から改めて再構成しなおしたのがOgdenである。すなわち「主体心理学として、精神分析理論を再構成」したのである（Ogden,1994）。

Ogden（1994）によれば、精神分析的治療空間には、精神分析家という主体と被分析者という主体の両者がいるだけでなく、その両者の間にある「間主体」が生まれ、それが両者の主体性を規定する。彼にとって主体とは、一人の人間の枠を超えた存在であり、弁証法的に脱中心化していくものであるという。ここに従来のtwo-person modelを超えた新たなtwo-person modelが生まれるのである。

1.2「あいだ」の空間で生起すること

Ogdenが示す新たなtwo-person model、仮

にinter-subjects model（ISM）とする、を検討するにあたっては、主体（subject）の概念を整理しておかなければならない。それは、精神分析は、Freudの時代には俗称として「お話し療法／ものがたり療法」とも呼ばれたように、治療過程では主体と主体との対話の形で発展するからである。そして主体は、「それぞれ自分が生み出したものと相手が生み出したものを解釈」しあうのである（Ogden,1986）。

さてOgden（1986,1994）は主体を静的なものの、観念的存在とはとらず、「体験している私（experiencing ‘I-ness’）」として常に流動的であり、変化する存在であると規定する。それは、彼の精神分析的治療関係の記述に如実に表れている。Ogden（1994）によれば、精神分析家は、治療のなかで被分析者の「生きている過去である体験」に声を与え、その想像に参画するという。それは、被分析者の体験を聴くだけでなく、その中に自分自身の創造を体験する。自分自身の創造とは、被分析者の過去を追体験することではない。むしろ、精神分析家が創造的に体験するのは、分析の第三主体である間主体についての精神分析家自身の体験のなかで産み出されるような形で作り出した被分析者の過去である。同時に被分析者は、この第三主体のなかで、間主体的に作り出されたものとしての自分自身が生きている過去を体験する。つまり、被分析者は、単に自分の過去を再体験するのではなく、精神分析家という主体との間で作り出されたものとしての過去を体験するのである。

また精神分析の視点にたつと、主体と主体の関わり合いの場では、意識レベルと同時に無意識レベルでの相互作用も生起している。これは、

Ogden が主体を「体験している私」として変化する存在であるとしたことと連続性のあることであろう。つまり、主体どおしの関わりの中で双方が、無意識的な影響、換言すれば自分では今まで考えもしたことが無く、また気がついたこともないことを考えたり行動したりする、を受けることも主体が変化していくことにつながるのである。

従って第三主体である間主体は、精神分析家と被分析者の意識、無意識を含んだ体験からなりたち、それは精神分析家と被分析者の弁証法的相互作用によって作り出される。弁証法的であるということは、精神分析家と被分析者の関係性がどちらかに偏ること無く、脱中心化され、新しい統合的な第三主体を作り出すということである。

2. 青年の「育ち」と『あいだ』の空間

2.1 育ったのか、育てられたのか

青年期の心理臨床は、精神疾患などを除くと基本的なモチーフとしてのアイデンティティの確立が面接室で語られることが少なくない。そのひとつとして、親からの分離个体化があげられよう。それは「墓守娘」（信田,2008,2011）に代表され、近年取り上げられることが多くなっている分離しがたい母－娘関係のみならず、青年の自立に関わるテーマである。

もちろん青年の親からの分離个体化は、親が子どもから離れていく、いわゆる子離れとも密接な関連があることは周知のことである。青年の心理的離乳と親の心理的断乳が「そったくどうき 啐啄同機」として起こるとき、青年は分離个体化の一步を踏み出すのである。

この点について、教育心理学的な観点から考えてみると、「育った」のか「育てられた」のか、ということに収斂することができよう。青年、ことに大学生以降の青年は、育てられてきたプロセスのなかで、いかに親をはじめとする家庭のルールや文化が自分らしく生きていくための障害、ないしはハードルであったことかについて、心理相談の場で語ることは少なくない。そこには、自分自身の力で育ってきた、今の自分を作ってきたという強い意志の表れが見て取ることができる。また親の立場に立つならば、「こんな子どもに育てた覚えは無い」という子どもへの叱責の言葉に見られるように、あくまでも親は子どもを育てるというパターンリズム paternalism 的な陳述を見ることができる。

この「育った」のか「育てられた」のかについて、考察する際に重要なのは、この二つの「あいだ」の空間で生起していたことは何か、という視点であろう。つまり大学生とその親世代を念頭におくならば、親と子とふたりの主体が関わり合うことによって、互いに影響し合い新たな第三主体としての双方が変容した姿、具体的には大学生の青年として、中年期の成人として、というそれぞれの成長した姿を検討していくことが重要になってくる。

2.2 共時的現象としての成長と「あいだ」の空間

Portmann が明らかにした「生理的早産」として出生するヒトは、養育者が無くては生存すらできないいわば、無力な存在としてこの世に生まれてくる。従って養育者との間で人生の早期から様々な交流をとおり学習し、生活適応的

な行動様式を習得することになる。この学習過程こそが、「育てられ」たか「育った」かのプロセスを明確にする契機となるのではないだろうか。

例えば、「親の背を見て育つ」ということは、Bandura のいうところのモデリングであり、まさに子どもは親の言動を手本としながら成長することである。これは、養育者（便宜上以下、親とする）に育てられるという側面を示していることである。一方で親は子どもが親の模倣をしたり、同一化した行動を取ると、誉めるなどその行動を強化する働きかけをおこなう。強化により、子どもはより一層その適合的な行動を取るようになる。この時、子どもは自主的に行動している、自分で取り組んでいるといういわば「育つ」感覚に支配されているともいえよう。

このモデリングの過程は、本来、子どもの発達に応じた動的なものである。そこでは、親は、自らの行動を模倣されたり、働きかけを受け入れる子どもの行動を観察することを通して、自身の育て方が伝わっていることを確認する。それは、親として子どもを育てているということを実感する契機にもなる。

一方で子どもは、思考の発達に従って、成長の過程で幼児期の親の行動を模倣するだけの時期を経て、学童期後半から青年期前期になると子どもの社会的関係を通して比較、批判そして自己判断をしながら親の言うこと自体を対象化しながら、親の働きかけに応じるようになる。この段階では、子どもは親の育てに関わる言動を鵜呑みにするのではなく、自分で育つという感覚を少しずつ持つようになる。この時期における親と子どもの関係は「第二次反抗期」とし

て人口に膾炙されている。

それでは、「あいだ」の空間からみた第二次反抗期はどのように理解することができるのであろうか。親は、子どもを育てる過程で、乳児期から学童期半ばにかけての約10年間、親が教え、子が模倣するあるいは、従うという体験様式を経験する。この体験様式を通しては、子どもという対象をkohutのいう自己対象としてとらえてしまうのである。それは、親という主体、子どもという主体の「あいだ」の空間が喪失し、子どもが親である自分の一部であるように体験することに他ならない。しかし、親と子どもの関係は、二つの主体の発達過程に応じた動的なものであり、関係性は発達に応じて変容するものである。親が子どもの発達、ことに思考の発達とそれを基盤とする心理的発達に基づき、子どもと親との「あいだ」の空間の距離や広がりの変化を理解していけないと、ふたつの主体の「あいだ」の空間への認知のずれが生じる。面接場面で語られる言葉を用いると、親にしてみれば「こんな子に育て覚えは無い」「こんなはずじゃなかった」という発言になる。また子どもにすれば「親はウザイ」「クソババア」といった捨て台詞になるのである。この「あいだ」の空間の認知のずれが、第二次反抗期、子どもにとっては第二次自己主張期、を引き起こすと言えよう。

社会心理学者の押見輝男は、「親しい間柄の『間（ま）』」から思春期の子どもの世界を読み解いている（押見,2014）。そこでは、親は発達にともなう変化する子どものパーソナルスペースを理解し、親子の間をつくるために、「親子の仲に垣を結う」ことが思春期の親子関係に重

要であることを指摘した。

この押見の指摘は、思春期の親子関係には「あいだ」の空間に対する親と子の認知がずれてしまうことによる、「あいだ」の空間の喪失を差し、その回復のためには、「あいだ」の空間を再設定することに他ならないということである。

Ogden は、「あいだ」の空間とは、ふたりの主体とおしの関わりをとおして、弁証法的に双方が脱中心化し、ふたりの主体がそれぞれ個として存在しながら相互的に影響を与え合う第3主体が生まれる場であることを論じた。子どもの発達過程も同様に、親と子どもが変容する個として存在し、発達に応じた相互の関わりあいをとおして、親は「育て」ながら「育ち」、子どもは「育てられ」ながら「育つ」という親子間の関係性の文化が第3主体として生まれてくるのであろう。この点を実証的に明らかにすることは、今後の課題である。

文 献

- 信田さよ子 2008 母が重くてたまらない—墓守娘の嘆き— 春秋社
- 信田さよ子 2011 さよなら、お母さん—墓守娘が決断する時— 春秋社
- Ogden,T.H. 1986 The matrix of the mind (狩野力八郎監訳 1996 こころのマトリックス 岩崎学術出版社)
- Ogden,T.H. 1994 Subjects of analysis. Jason Aronson (和田秀樹訳 1996 「あいだ」の空間 新評論)
- 押見輝男 2014 思春期の子どもの世界—親しい間柄の「間」— 立教大学交友会レディスクラブ・豊島区エポック10主催講演会 (2014年10月25日、於:立教大学) 配布資料
- Portmann, A. (高木正孝訳) 1961 人間はどこまで動物か 岩波新書
- Winnicott,D.W. 1971 Playing and Reality. Tavistock Publications Ltd. (橋本雅雄訳 1979 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社)